

族群與認同：日本學界對小熊英二《〈日本人〉的境界》的評論

土屋 洋

- 一，小熊英二與其研究領域
 - 二，本書出現的背景：90年代日本言論界的概況
 - 三，本書的主要論點
 - 四，日本學界對本書的反應
 - 五，日本學界對本書的稱讚
 - 六，日本學界對本書的批評
 - 七，族群與認同
 - 八，總結
- 主要書評目錄

「對我來說，自己的著作是否讓讀者「感動」，或讓讀者感到「美麗」，這要比研究者之間爭取差異和嶄新性更重要」（小熊 1999）
（私にとって、自分の著作が読者にとって「感動的」であるか、「美しい」ものたりえているか否かのほうが、研究者間での差異や斬新さを競うことよりも関心がある）

一，小熊英二與其研究領域

(1)學經歷

- 1962年 東京都出生
- 1987年 東京大學農學部畢業
岩波書店入社（~1996年）
- 1995年 東京大學大學院綜合文化研究科國際社會科學專攻碩士課程畢業
- 1998年 同上博士課程畢業
- 1997年~ 慶應義塾大學綜合政策學部專任講師
- 2000年~ 同上助教授

→專攻社會學，並不是歷史學的專家

(2)研究領域

主要著作：

《單一民族神話的起源：〈日本人〉自畫像的系譜》，新曜社，1995年
A Genealogy of 'Japanese' Self-images, trans. by David Askew, Trans Pacific Press, 2002.

《〈日本人〉的境界：沖繩、愛奴、臺灣、朝鮮 從殖民地支配到復歸運動》，新曜社，1998年

《〈民主〉與〈愛國〉：戰後日本的民族主義與公共性》，新曜社，2002年 等
→著作都厚重，但題目廣泛，分析明晰，因此受到了廣大讀者的歡迎

二，本書出現的背景：90年代日本言論界的概況

- 90年代的世界：冷戰結構的崩潰，東西意識形態對立的結束，民族主義的復興
- 90年代的日本：後現代主義思想的高漲，民族主義的復興 ex. 新歷史教科書編撰會(1996~)

→解構主義(「日本人」認同的解體)／民族主義(「日本人」認同的強化)的同時出現

三，本書的主要論點

- 從歷史的角度來出發，「重新探討一次〈日本人〉以及〈日本〉的概念」(本書 p.3)
- 「日本」=「有色的帝國」(本書 p.661)

：處於「歐洲」和「亞洲」之間，含有矛盾的存在，隨著情況的變化，其內涵(政策)也會變

- 建議「既是「日本人」又不是「日本人」的模稜兩可自我認同(本書 p.666)

→解構主義／民族主義、左派／右派對立的揚棄

四，日本學界對本書的反應

- 對本書的書評(見主要書評目錄)

→報紙和一般性的雜誌上有不少評論，但學術性雜誌上的評論卻不太多，尤其是由歷史專家做的評論連一篇都沒有

五，日本學界對本書的稱讚

(1)大作

- 「一共 778 頁 …驚人的筆力！(合計 778 頁 …おそろべき筆力である)」(上野 1999)
- 「在前一個作品出版之後，只用了三年又寫成了如此的大作，我佩服作者的活力和創作能力…(前著の出版から三年でこれだけの大作をものした著者のバイタリティと力量に…敬意を払う)」(小堀 2000)
- 「浩瀚的工作(浩瀚なる仕事)」(丸川 2005)

→大作

- 「小熊先生成功地構築了圍繞「日本人」多層話語的資料庫(小熊氏は「日本人」を

めぐる重層的な「言葉」のアーカイブを形成することに成功)」(佐藤 1999)

・「針對「沖繩、愛奴、朝鮮及臺灣」以及「日本人」的境界，進行多層且歷史性的敘述，由此成功地提出了從單獨的對象上難以看出來的論點（「沖繩・アイヌ・朝鮮そして台湾」と〈日本人〉の境界を重層的・歴史的に敘述することをつうじて、それぞれ単独の對象を焦点にしては見えにくい論点を、著者はあぶりだすことに成功した）」(上野 1999)

→因爲是大作，內容豐富，所以有資料性價值，並可以俯視日本殖民地統治的全貌

→反過來說，在各個領域上沒有開拓性、獨創性？

(2)分析明晰，漂亮！

・「本書的分析既優雅又明晰(本書の分析はエレガントであり、かつクリア)」(小堀 2000)

・「雖然分析這麼多的話語，但一直到最後幾乎沒有視點的搖動(これほど広範な言説を次々に取り上げながら、最後まで著者の視点にほとんどぶれがない)」(吉見 1998)

→有一貫的理論。但這卻是缺點？(見批評點(1))

(3)「歐美」－「日本」－「殖民地」的多層分析框架

・「圍繞國族國家設定的境界，從雙層的「他者」(例如，歐美與亞洲，帝國主義列強與殖民地等…土屋)的角度來進行分析。…針對近代日本到底是「歐美的受害者」還是「對亞洲的加害者」這個問題，作者回答說兩方面都有(国民国家にとっての境界の設定を、二重の「他者」(欧米とアジア、帝国主義列強と植民地等…土屋)の存在から説きおこしたこと…。…近代日本は「欧米の被害者」なのか「アジアの加害者」なのか、という問いに対して、著者はどちらにもイエスと答える)」(上野 1999)

→在分析日本與殖民地關係的框架中，還加了一項「歐美」的視點。這分析框架尙未明確地提出過。

(4)注重「既是「日本人」又不是「日本人」」的存在

・「本書重視由被統治者針對統治者的話語進行的「強詞奪理(読み替え)」，由此描寫出之前以分離獨立爲前提的歷史學沒有好好提出過的一面(本書では被支配層による支配的言説の読み替えが重視され…、従来 of 分離独立を前提とした歴史解釈では必ずしも正面から扱われなかった側面を描きだす)」(酒井 1999)

→之前的歷史學比較重視在殖民地的獨立運動。本書卻重視「既是「日本人」又不是「日本人」的人們進行的抵抗活動。

(5)闡明包攝也是壓迫，排除也是壓迫

・「針對包攝和排除這兩方面，都是從其正面和負面的觀點來進行分析，因此能夠拋開「排除到國民國家之外就是歧視」的單純看法(包摂と排除のそれぞれをプラス面・マイナス面の両側面からアプローチすることで、「国民国家からの排除即差別」とい

う短絡を免れることができた)」(上野 1999)

六、日本學界對本書的批評

(1) 預定和諧

・「作者的論述方式就是從結果來決定原因的「預定和諧」的寫法(論述枠組みが結果から原因を決定する「予定調和論的」記述になっている)」(笠井 1999)

・「小熊先生在論述方式上一點都不會存在動蕩…。換句話說，他的論述方式本來是由不會存在動蕩的方式而構成的(小熊氏のスタイルには、全く波乱があり得ない…。別の言い方をするならば、元元から全く波乱がないようなスタイルによって成立している)」(丸川 2005)

→先有結論，後有論證。觀念性較強，會不會沒好好看資料？

(2) 固定的框架

・「小熊先生是否認為「歐美」「日本」「殖民地」這三者的關係是很固定的？…難道只有「歐美」的力量才會影響到日本的殖民地政策嗎？(小熊氏は…「欧米」「日本」「植民地」という三者の關係を、極めて固定的なものとして捉えていないだろうか。…「欧米」の力のみが植民地政策を方向づけていたのだろうか)」(佐藤 1999)

・「作者論述的一貫性卻令人不安。…除了最後一章的討論之外，本書難道不是在質疑「日本人」境界的存在，而是把它做為前提嗎？(著者のぶれのなさが逆に気にもなってくる。…最終章の議論を除き、本書は「日本人」の境界そのものの存在を問うよりも前提としているのではないか)」(吉見 1998)

・「小熊先生指出「日本」和「殖民地」之間的境界是可變的…。可是，一直處於境界「內部」的「日本」卻做為政治主體發佈政策，而真正給它給予影響的是「西歐」，從它受到影響的是「殖民地」，如此的關係是不變的…。(所以本書)好像讓人重新再確認一次「統治」/「被統治」之間境界的存在。…(總之)，即使多少有些境界的變動，「日本人」的概念不是也明確的存在著嗎？(小熊氏は「日本」と「植民地」の境界が可變的であることを指摘…。しかし常に境界の「内側」にある「日本」が政治主体としてとしての政策を発すること、そしてそれに影響を与えるのが「西歐」であり、影響を与えられるのが植民地である、という關係自体は揺らがない…。(よって本書は)「支配」－「被支配」の境界を再確認しているようにも受け取られる。…(総じて)「日本人」という概念もまた、境界に多少の変動があつたとしても確固として存在していたとされるのではないだろうか)」(佐藤 1999)

→歐美中心主義。沒好好意識到來自「殖民地」或「亞洲」的力量。

(3) 忽略被統治者

・「雖然說重視多樣性(本書 p.7)，但作者到底有沒有意識到「被統治者的多樣性」呢？在我看來，作者所說的「被統治者」僅僅是被統治地區「有話能說」的少數知識分子

而已(「多様性を意識する」と言いながら、ここに「被支配者側の多様性」は意識されていたのであろうか。著者の言う「被支配者」とは、「語る言葉を持った」被支配地域の少数の知識人であるように思われる)」(小堀 2000)

・「可惜的是，作者不太注重「國民」內部的多様性，例如性別、階級、身份等等的差別(「国民」内部の多様性—ジェンダーや階級や身分による差異化を問題にする視角が弱いことが残念)」(上野 1999)

→太接近日本統治者的話語

(4)不支持少數族群(minority)的民族主義(nationalism)

・「據作者所說，一邊是遭到歐美或白人的歧視和侵略，一邊是侵略、統治亞洲的「有色的帝國」日本，其矛盾體和少數族群(依靠少數族群民族主義一邊抵抗強者一邊統治弱者)的矛盾體是同質的…。其實，…與其指出兩者之間結構的同質性，還不如透過各個固有的歷史，強調歷史性差異呢？(著者によると、欧米や白人から差別と侵略にさらされ、アジア地域を侵略支配した「有色の帝国」日本の両義性と、マイノリティー・ナショナリズムにより、強者に対抗しながら逆に弱者を支配してゆくマイノリティーの両義性とは、同質なものだという…。しかし…両者の構造の同質性を指摘するのではなく、おのおのの固有の歴史性に着目し、その歴史的差異を強調すべきだったのではないか)」(屋嘉比 1998)

→理論先行

(5)多元主義的內涵如何

・「作者重視多元主義的選擇。但針對與「多元主義」有關的一系列問題在大正期之後所發展的趨向，是否需要更詳細的考察？(著者は…多元主義的な選択肢を重視している。…「多元主義」と重なる問題群が大正期以降どのような展開をたどるかについては、いま少しきめ細かな考察を必要とするのではあるまいか)」(笠井 1999)

→「多元主義」→「大東亞共榮圈」論。是否是侵略的理論？

七、族群與認同

「對於近代國族國家或民族主義，(我採取了)一邊批評一邊給予一定評價的兩義性態度(近代国民国家や民族主義にたいし、批判的ではあっても限定的に評価するという兩義的姿勢)」(小熊 1999)

→國族主義(nationalism)的高漲很容易產生對國內少數族群的歧視、壓迫。又會產生對於國外的強硬態度。另，少數族群即使獲得獨立，建立新的國族國家(nation-state)，也會重演同樣的歷史。因此，作者批評國族國家。

→90年代日本，面臨國族主義的復興，有不少人反而批評國族主義，提倡文化多元主義或混血(creole)主義等看法。其是，據作者所說，這些文化多元主義或混血主義倒是大日本帝國擴大殖民地時也採用的邏輯，也就是容易會變成「侵略」的邏輯。因此，

作者也不積極的支持這些看法，並在一定程度上支持國族主義。

→總之，作者提倡「既是「日本人」又不是「日本人」」的模稜兩可自我認同。

→其是大多數日本人(包括小熊先生)在歷史上沒有體驗過如此深刻的自我認同分裂的狀態

八，總結

- 本書的理論性較強，所以從實證的方面來說，應該會有不正確或忽略的地方，需要通過各個領域歷史專家的指正。

- 其理論框架太注重「歐美」的要素。應該也可以從「亞洲」的觀點來批評本書。

- 雖然提倡「既是「日本人」又不是「日本人」」的自我認同狀態，但這建議必須通過臺灣、韓國等讀者的考驗。

「通過小熊先生的書被翻成中文或韓文的機會，才可以弄清此書的侷限性(小熊氏の書物が中国語なり韓国語なりに翻訳される契機を通じてこそ、それ(叙述の限界性)は確かめられるはず)」(丸川 2005)

《〈日本人〉の境界》主要書評目録

一、報紙

- 《毎日新聞》 1998.8.30 池澤夏樹評
《讀賣新聞》 1998.9.6 野村 進評
《朝日新聞》 1998.9.6 吉見俊哉評
《公明新聞》 1998.10.26 岩田萬里評
《東京大學新聞》 1998.10.20 山脇直司評
《沖繩タイムス》 1998.8.27 屋嘉比收評
《沖繩タイムス》 1999.4月 座談會（小熊英二、仲里 效、星名宏修、進行・長元朝浩）

二、一般雜誌

- 《中央公論》 1998.10月號 船曳健夫評
《サンデー毎日》 1998.10.4 川村 湊評
《週刊文春》 1998.10.1 池澤夏樹評
《プレジデント》 192000.8.14 武田 徹評

三、學術性雜誌

- 上野 千鶴子 1999 〈ナショナリズムを超える思想〉 《相關社會科學》9
酒井 哲哉 1999 〈大膽な構圖と入念な細部〉 《相關社會科學》9
佐藤 美奈子 1999 〈支配する〈日本人〉への問い〉 《相關社會科學》9
小熊 英二 1999 〈ご書評に應えて〉 《相關社會科學》9
笠井 正弘 1999 〈書評 小熊英二《〈日本人〉の境界》〉 《コリアン・マイノリティ研究》2
小堀 哲郎 2000 〈書評論文《〈日本人〉の境界》〉 《文化人類學研究》1
丸川 哲史 2005 〈小熊英二：近代日本の空間認識と「アジア」の相克〉 《大航海》55